

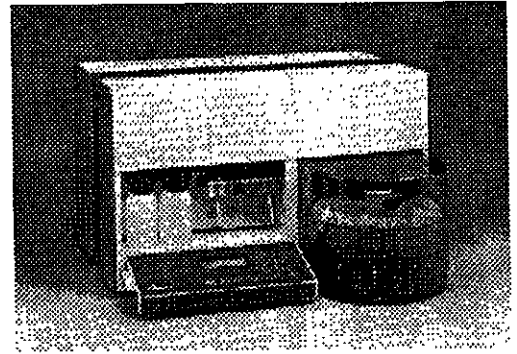
參考資料

EiaFoss

アイアフォス

自動 ELISA・食中毒菌判定装置

(免疫磁気ビーズによる食中毒菌検査を自動化)



特徴

- ・ 集菌能力に優れた免疫磁気ビーズを用いて高精度な検査が可能。
- ・ 免疫磁気ビーズを用いた Eia 判定操作を自動化。サンプルチューブに検体（加熱した培養液）を注入、スタートボタンを押すだけで2時間以内に結果判定。
- ・ 1回の測定で27検体の判定可能。

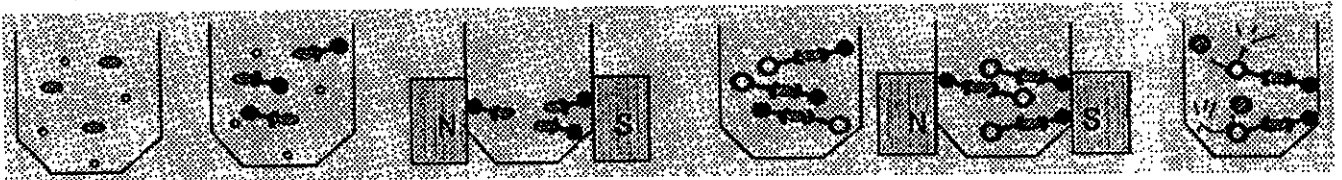
測定概念〈自動 ELISA 測定の流れ〉

測定準備

- ・ 加熱処理した検体（夾雑物を含む培養液）をサンプルチューブに注入
- ・ サンプルチューブおよび試薬キットを EiaFoss にセットし、測定開始

自動 ELISA 処理と検出まで

1. 各検体に免疫磁気ビーズ（Immunospheres）を添加、抗原抗体反応によって抗原を捕捉。
2. 磁石によってサンプルチューブ壁面に免疫磁気ビーズと結合した抗原を吸着させ、夾雑物を吸引・除去後、サンプルチューブ内を洗浄。
3. 標識抗体 Conjugate（酵素標識した二次抗体）を添加し、免疫磁気ビーズと抗原の結合体に結合させ、抗原をサンドイッチ。
4. 磁石による分離・洗浄で余剰の酵素標識抗体を除去。
5. 基質（Substrate）を添加、基質は酵素によって分解され蛍光発光。
6. ストップ剤の添加で、酵素反応を停止。
7. ピペットから吸引され蛍光ディテクターへ移動、蛍光検知値を測定。
8. 検体の蛍光検知値（シグナル値）及びブラインド値、キャリブレーター値から計算式に従ってノーマルシグナル値を算出。
9. ノーマルシグナル値を用いて陽性（+）、陰性（-）を判定。



装置仕様

測定概念	ELISA（酵素標識免疫測定）法
測定項目	サルモネラ・E.coli O157・リステリア・カンピロバクター
結果表示	陽性（+）／陰性（-）判定及び、蛍光シグナル値表示
測定時間	2時間以内
測定検体数	1測定あたり最大27検体

EiaFoss E.coli O157

EiaFoss E.coli O157 法は24時間の選択増菌培養と組み合わせられています。

ノボピオシンを添加した EC 培地の使用を奨励していますが、この培地の使用で加工されていない肉、牛乳、野菜などを対象サンプルにする場合、他の培地よりも優れていることが分かっています。

無菌的に操作を行って下さい。サンプリングや均一化は ISO 等の標準法に沿って行って下さい。

EiaFoss 測定用 E.coli O157 培地及び試薬の調整法

1. 準備する培地・試薬

- ・ E.coli Media (EC 培地) (Difco0314-01)
- ・ ノボピオシンナトリウム塩 (SIGMA N-1628)

2. 調整法

ノボピオシン添加 EC 培地 (EC+N)

- ・ E.coli Media 37.0g を蒸留水 1L に加え、ゆっくりと加熱して完全に溶解させる。
- ・ 121 °C で 5-20 分間加圧滅菌する。
- ・ 50 °C に冷却し、ノボピオシン溶液を 10mL (2mg / L) 加える。

ノボピオシン溶液

- ・ ノボピオシンナトリウム塩 200mg を蒸留水 100ml に完全に溶解させ、濾過殺菌 (0.22 μm) する。

※冷蔵保存 (2-8 °C) で 2 週間保存可能。

- ・ 50 °C に冷却し、エタノール / 滅菌水 (1:1) 5mL に溶解した Fraser supplement を 2 バイアル分加える。

3. 培養法

- ・ 225mL の EC+N 培地に 25g のサンプルを投入する。
 - ・ 41.0 ± 0.1 °C 恒温器で 22-26 時間培養する。
- ※ EC 培地は EiaFoss 測定が終了するまで冷蔵保存する。(陽性サンプルの確証試験を行う際に使用する。)

4. サンプルの加熱処理

- ・ 培養後、培地の入った試験管を 100 °C で 15 ± 1 分間加熱処理する。
- ※加熱処理により菌を殺菌/不活性化する。
- ・ 加熱処理後、すぐにサンプルを 15-35 °C に冷却する。
- ※加熱処理し、冷却したサンプルを EiaFoss 測定に使用する。

注意) タンパク含量の高いサンプルを加熱処理すると溶解していたタンパクが凝縮あるいは沈殿する事が有ります。このようなサンプルは遠心分離するか、時間をおいて沈殿させます。EiaFoss 装置のチュービングを阻害する恐れがあるため、サンプルチューブ内には直径 1mm 以上の粒子を入れないようにして下さい。

EiaFoss サルモネラ

サンプルの培養は Foss 社で開発された FOSSEB (Foss Salmonella Enrichment Broth) を用いて行います。

生鮮食品中のサルモネラと加工食品中のサルモネラは菌の状態が異なるため EiaFoss 測定で FOSSEB I と FOSSEB II の 2 種類の異なる培養法が開発されています。

FOSSEB I (生鮮食品用) : 冷蔵・冷凍以外の加工をされていないもの

FOSSEB II (加工食品用) : 乾燥、加熱処理、塩漬け、化学保存料添加、薫製、酸処理等の加工処理を受けたもの

FOSSEB 概要

Foss Salmonella Enrichment Broth

食中毒菌自動測定装置 EiaFoss と同時に開発。

北欧ではサルモネラ菌の問題が深刻化し、迅速で高感度なサルモネラ菌の測定法が求められた。サルモネラ菌は損傷を受けている場合が多く、それらを再生させる必要と同時に選択的に増菌する必要が有るため、培地と自動測定装置との開発が同時に行われる。

生鮮食品用に FOSSEB I、加工食品用に FOSSEB II を使用。

生鮮食品中ではサルモネラ菌の損傷程度は低い一方でサルモネラ菌以外の雑菌も多く存在していると考えられる。FOSSEB I はサルモネラ菌を選択的に増殖させる能力に優れており、冷蔵・冷凍以外の加工されていない食品に用いられる。例、液卵・生の挽肉・冷蔵、冷凍肉など。

加工食品中のサルモネラ菌は乾燥・加熱・塩づけ・化学保存料の添加・薫製処理・酸処理などで損傷を受けており、一方で、加熱処理等で他の雑菌の数は多くないと考えられる為、FOSSEB II は損傷を受けているサルモネラ菌を効果的に再生、増殖させる。例、チーズ・スモークハム・低温殺菌乳・粉乳など。

EiaFoss 測定用 サルモネラ生鮮食品培養法

サルモネラ（生鮮食品）：冷蔵・冷凍以外の加工をされていないもの

注意) 白身液卵は天然阻害物質を含むため専用の培養法を使用。

サンプルの培養は2段階で行われ、Foss 社で開発した FOSSEB I で前培養を、次に添加剤を加えた M-Broth で培養。

1. 準備する培地・試薬

- ・ FOSSEB I
- ・ ヨウ素
- ・ ヨウ化カリウム
- ・ ノボビオシンナトリウム塩
- ・ M-Broth (Difco0940)

2. 調整法

ヨウ素溶液（約 50 検体分）

- ・ 室温でヨウ素 60g とヨウ化カリウム 50g を蒸留水 200mL に加え、マグネットスターラーで1時間攪拌し溶解させる。

※保存中、ヨウ素が多少沈殿するが問題ない。

ノボビオシン溶液（約 250 検体分）

- ・ ノボビオシンナトリウム塩 100mg を蒸留水 100mL に完全に溶解させ、濾過殺菌(0.22 μ m)する。

※冷蔵保存(2-8 °C)で2週間保存可能。

FOSSEB I（約 4 検体分）

FOSSEB I ストック培地 = FOSSEB I のみ

FOSSEB I 培養培地 = FOSSEB I + ノボビオシン溶液 + ヨウ素溶液

FOSSEB I ストック培地

- ・ FOSSEB I component A 21g と FOSSEB I component B 17g を蒸留水 1000mL で攪拌しながら加熱溶解させる。(60-100 °C)
- ・ 121 °C で 15-20 分間加熱滅菌する。加熱滅菌後すぐに室温以下に冷却する。

※少量の粉末が残っても問題ない。

※ FOSSEB I ストック培地は室温 (20-28 °C) で 24 時間、冷蔵保存 (2-8 °C) で 7 日間保存可能。

FOSSEB I 培養培地

・使用前に 1L の FOSSEB I ストック培地に対し 1.5mL のノボビオシン溶液と 19mL のヨウ素溶液を加える。ボトルをよく振り、茶色のヨウ素の色が直ちに消えるのを確認する。

※ 500ml 滅菌フラスコあるいはバックを用いる。サンプリングの直前に 25g サンプルあたり 225g ± 10g の FOSSEB I 培養培地を計り取る。

(サンプル : FOSSEB I の比率は、1 : 9)

※サンプリング前の FOSSEB I 培養培地の保存温度は 15-30 °C。

注意) FOSSEB I 培養培地は 4 時間以内に使用する。

M-Broth (MBN) (約 100 検体分)

MBN ストック培地 = M-Broth のみ

MBN 培養培地 = M-Broth + ノボビオシン溶液

MBN ストック培地

・ M-Broth 36.2g、蒸留水 100mL を混合し攪拌・振蕩しながら 80-100 °C まで加熱し、培地が完全に溶解したら保存培地を試験管に 10mL ずつ分注する。

・ 121 °C で 15-20 分間加熱滅菌する。

※保存培地は冷蔵保存 (2-8 °C) で 1 ヶ月間保存可能。

MBN 培養培地

・ 10mL の MBN ストック培地に付き 100 μ L のノボビオシン溶液を加え混合する。

注意) MBN 培養培地は調整当日中に使用する。

3. 培養法

前培養

・ 225mL の FOSSEB I 培養培地に 25g のサンプルを投入する。サンプリング及び均一化の手順は ISO など標準法の規定に従う。

・ 41.0 ± 0.5 °C で恒温器又は恒温水槽で 19-24 時間培養する。

ポスト前培養

- ・ FOSSEB I 培地をよく攪拌する。
- ・ 0.5mL の FOSSEB I 培地を 10mL の MBN 培養培地に投入し、試験管内でよく混合する。
- ・ 42.0 ± 0.2 °C の恒温水槽で 3 時間 \pm 5 分間培養する。

4. サンプルの加熱処理

- ・ 培養後、培地の入った試験管を 100 °C で 15 ± 1 分間加熱処理する。
- ※加熱処理により菌を殺菌／不活性化する。
- ・ 加熱処理後、すぐにサンプルを 15-35 °C に冷却する。
- ※加熱処理し、冷却したサンプルを EiaFoss 測定に使用する。

注意) タンパク含量の高いサンプルを加熱処理すると溶解していたタンパクが凝縮あるいは沈殿する事が有ります。このようなサンプルは遠心分離するか、時間をおいて沈殿させます。EiaFoss 装置のチュービングを阻害する恐れがあるため、サンプルチューブ内には直径 1mm 以上の粒子を入れないようにして下さい。

EiaFoss 測定用 サルモネラ加工食品培養法

サルモネラ（加工食品）：乾燥、加熱処理、塩漬け、化学保存料添加、薫製、酸処理等の加工処理を受けたもの

サンプルの培養は2段階で行われ、Foss 社で開発した FOSSEB II で前培養を、次に添加剤を加えた M-Broth で培養。

1. 準備する培地・試薬

- ・ FOSSEB II
- ・ ノボビオシンナトリウム塩
- ・ M-Broth (Difco0940)

2. 調整法

ノボビオシン溶液（約 90 検体分）

- ・ ノボビオシンナトリウム塩 100mg を蒸留水 100mL に完全に溶解させ、濾過殺菌(0.22 μ m)する。

※冷蔵保存(2-8 °C)で2週間保存可能。

FOSSEB II（約 2.5 検体分）

FOSSEB II ストック培地 = FOSSEB II のみ

FOSSEB II 培養培地 = FOSSEB II + ノボビオシン溶液

FOSSEB II ストック培地

- ・ FOSSEB II 21g を蒸留水 1000mL で攪拌しながら加熱溶解させる。(60-100 °C)
- ・ 121 °C で 15-20 分間加熱滅菌する。

※少量の粉末が残っても問題ない。

※ FOSSEB II ストック培地は室温(20-28 °C)で2週間、冷蔵保存(2-8 °C)で4週間保存可能。

FOSSEB II 培養培地

- ・ 使用直前に 1L の FOSSEB II ストック培地に対し 2.5ml のノボビオシン溶液を加える。
- ※ 500ml 滅菌フラスコを用いる。サンプリングの直前に 25g サンプルあたり 400g \pm 20g の FOSSEB II 培養培地を計りとる。

(サンプル : FOSSEB II の比率は、1 : 16)

※サンプリング前の FOSSEB II 培養培地の保存温度は 15-30 °C。

注意) FOSSEB II 培養培地 (ノボビオシン添加済み) は調整当日に使用する。

M-Broth (MBN) (約 100 検体分)

MBN ストック培地 = M-Broth のみ

MBN 培養培地 = M-Broth + ノボビオシン溶液

MBN ストック培地

・ M-Broth 36.2g、蒸留水 100mL を混合し攪拌・振蕩しながら 80-100 °C まで加熱し、培地が完全に溶解したら保存培地を試験管に 10mL ずつ分注する。

・ 121 °C で 15-20 分間加熱滅菌する。

※保存培地は冷蔵保存 (2-8 °C) で 1 ヶ月間保存可能。

MBN 培養培地

・ 10mL の MBN ストック培地に付き 100 μ L のノボビオシン溶液を加え混合する。

注意) MBN 培養培地は調整当日中に使用する。

3. 培養法

前培養

- ・ 400mL の FOSSEB II 培養培地に 25g のサンプルを投入する。サンプリング及び均一化の手順は ISO など標準法の規定に従う。
- ・ 恒温器 37.0 ± 0.5 °C で 4 時間培養する。培地をよく攪拌した後、41.0 ± 0.5 °C の恒温器でさらに 15-20 時間培養する。

ポスト前培養

- ・ FOSSEB II 培地をよく攪拌する。
- ・ 0.5mL の FOSSEB II 培地を 10mL の MBN 培養培地に投入し、試験管内でよく混合する。
- ・ 42.0 ± 0.2 °C の恒温水槽で 3 時間 ± 5 分間培養する。

4. サンプルの加熱処理

・ 培養後、培地の入った試験管を 100 °C で 15 ± 1 分間加熱処理する。

※加熱処理により菌を殺菌/不活性化する。

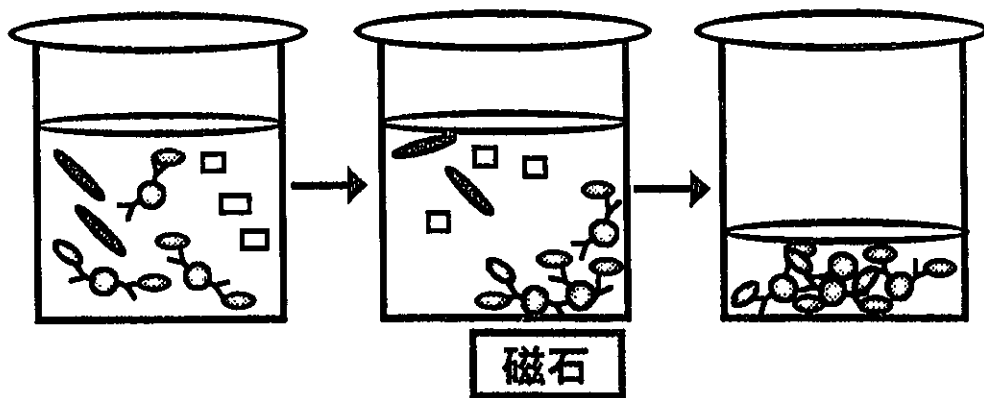
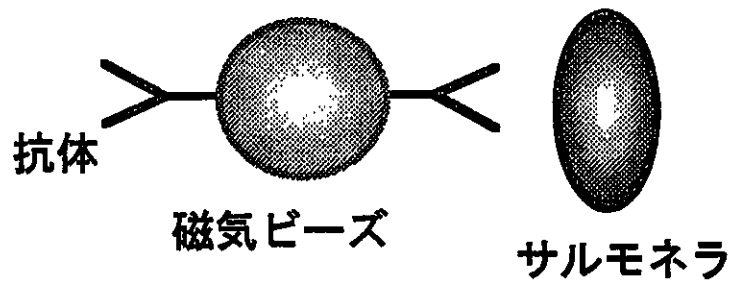
・ 加熱処理後、すぐにサンプルを 15-35 °C に冷却する。

※加熱処理し、冷却したサンプルを EiaFoss 測定に使用する。

注意) タンパク含量の高いサンプルを加熱処理すると溶解していたタンパクが凝縮あるいは沈殿する事が有ります。このようなサンプルは遠心分離するか、時間をおいて沈殿させます。EiaFoss 装置のチュービングを阻害する恐れがあるため、サンプルチューブ内には直径 1mm 以上の粒子を入れないようにして下さい。

サルモネラ チェック (MB)

測定原理



抗体感作磁気
ビーズとサル
モネラとの反応

磁石で集ビーズ
洗浄

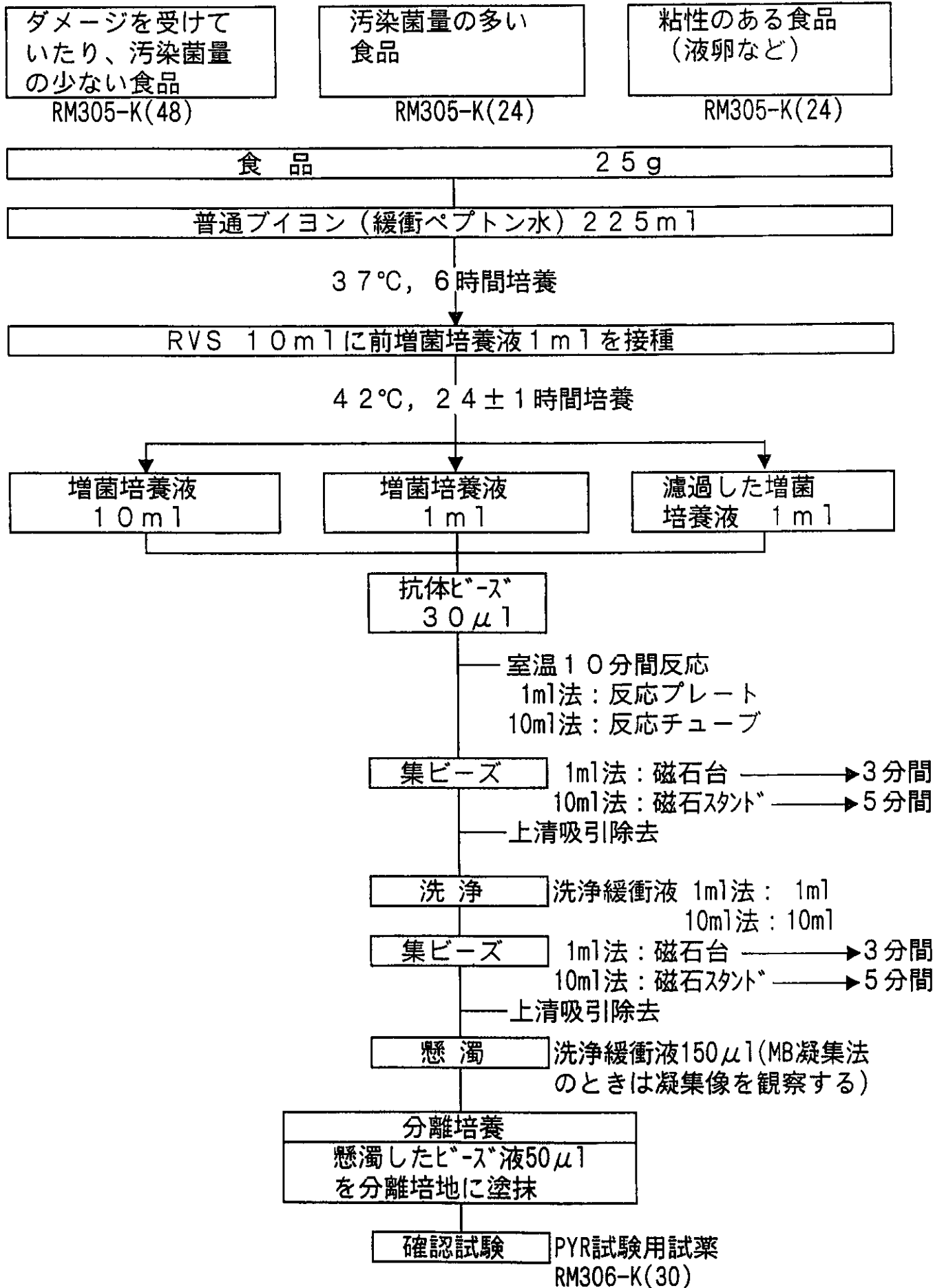
サルモネラの集菌

磁気ビーズ感作に用いた サルモネラH抗体

抗体	反応する抗原	抗体	反応する抗原
a	a	r	r
b	b	y	y
c	c	Z	Z
d	d	Z ₄ , Z ₂₃	Z ₄ , Z ₂₃ ; Z ₄ , Z ₂₄ ; Z ₄ , Z ₃₂
e,h	e,h	Z ₁₀	Z ₁₀
e,n,x	e,n,x; e,n,Z ₁₅	Z ₂₉	Z ₂₉
m,t	m,t ; f,g ; f,g,t ; g,m ;	Z ₃₅	Z ₃₅
f,g	g,m,t ; g,m,s; g,s,t ; g,Z ₅₁ ;	Z ₃₆	Z ₃₆
g,p	g,t ; g,p ; g,q ; g,p,u	Z ₃₈	Z ₃₈
i	i	1,5	1,2 ; 1,5 ; 1,6 ; 1,7 ; Z ₆
k	k		
l,v	l,v ; l,w ;		
l,w	l,Z ₁₃ ; l,Z ₂₈		

サルモネラチェック (MB)

—磁気ビーズ法による食品中のサルモネラ検出キット—



イムノクロマトグラフィー法キット
NOW「アスカ」大腸菌O157

大腸菌 O157:H7 は、食水系感染症の志賀毒素産生性大腸菌 (Shiga toxin-producing *E.coli*, STEC) の一つに分類されている。

ヒトの STEC 感染は、食品または水中の 100 個内外の菌数でも大腸粘膜へ接着して増殖し、出血性腸炎を起こして溶血性尿毒症症候群 (HUS) を続発することが知られている。

本品は、大腸菌 O157 を免疫クロマトグラフィーの原理を利用して簡便かつ迅速に検出するキットである。

■特徴

本品は、免疫学的分析法を利用して迅速に選択増菌培地中の大腸菌 O157 抗原を定性的に検出できる。

■原理

テストパネルにはウサギ抗大腸菌 O157 ポリクロナール抗体感作金コロイド粒子およびヤギ免疫グロブリン感作金コロイド粒子が吸収保持され、コントロールラインには抗ヤギウサギ血清が、サンプルラインにはウサギ抗大腸菌 O157 ポリクロナール抗体が固定されている。検体中に大腸菌 O157 抗原が存在すると、ウサギ抗大腸菌 O157 ポリクロナール抗体感作金コロイド粒子と抗原抗体反応を起こして補足され、次にテストラインのウサギ抗大腸菌 O157 ポリクロナール抗体と反応してサンプルラインに赤色ラインが表示される。一方、コントロールラインは、ヤギ免疫グロブリン感作金コロイド粒子がコントロールラインの抗ヤギウサギ血清と抗原抗体反応を起こして補足され赤色ラインを示す。判定は、両ラインに赤色ラインが表示されたとき陽性、コントロールラインのみ赤色ラインが表示された場合は陰性となる。

■構成

- | | |
|-----------|--------|
| 1. テストパネル | 25 パネル |
| 2. 添加試薬 | 1 本 |
| 3. 綿棒 | 25 本 |

■使用方法 (用法及び用量)

I. 試料の調製

1. 選択増菌培地で培養された検体を攪拌して均一にする。
2. 家畜等の糞便検体は、ペプトン水等で6~8時間前培養を行い、その培養液を選択増菌培地の 1/10 量を接種して一夜培養を行う。

II. 操作方法

1. テストパネルはそのまま使用する。

2. 付属の綿棒に I . の調製した検体を浸し余分な液を除いた後、右側パネルの綿棒挿入口 (SWAB) に綿棒を挿入する。
3. 添加試薬口 (REAGENT A) に添加試薬を 2 滴加える。
4. 綿棒に添加試薬が吸収されたのを確認後、テストパネルの接着シールを剥がして左右のパネルを張りあわせる。
5. 張りあわせ後、10 分後に判定する。

Ⅲ. 判定

陽 性：サンプルラインおよびコントロールラインに赤色線が表示される。

陰 性：コントロールラインのみに赤色線が表示される。

測定不能：両ラインに赤色線が表示されない。

サンプルラインのみに赤色線が表示される。

■ 操作上の留意事項

1. 判定は、細菌検査に習熟および経験のある人の管理および指導下で実施する。
2. 最終判定は、形態、生化学的性状テストおよび Vero 毒素の検出等と合わせて報告する。
3. 判定は、必ず 5 分以内に行うこと。5 分以内に判定しないと誤った結果を生じる可能性がある。
4. 妨害物質として、雑菌による汚染が考えられるので、無菌的に使用する。
5. 検体中に共通抗原をもつ菌種が存在している場合は偽陽性を示すので十分注意する。
6. 本品は、in vitro 試験のみ使用する。
7. 増菌培地は、大腸菌 O157 用の培地を使用する。
8. 偽陽性が疑われる場合は、100°C で加熱後に再テストする。
9. キット付属の綿棒以外は使用しないこと。

■ 使用上または取扱い上の注意

1. 細菌は、習熟した人の管理指導下で十分に注意をして取り扱う。
2. 使用前に必ず使用取扱説明書を読む。
3. 添加試薬には 0.02% アジ化ナトリウムを含有するので廃棄の際は、多量の水で流す。また、アジ化ナトリウムは、銅や鉛と反応して爆発性の金属アジドを生成する恐れがあるので注意する。
4. 試薬および菌液等が皮膚にふれたときは直ちに洗い流すか、消毒をする。
5. 廃棄は、高圧滅菌するか、消毒液に浸してから焼却処分する。
6. 有効期限を過ぎたものは使用しない。
7. 保存温度は守る。
8. *Salmonella* O30 群および *Citrobacter* の一部が交差反応を示す。
9. キットに付属の綿棒以外の綿棒を使用した場合、正常に反応しない場合がある。

■構成

1. テストパネル 25パネル
2. 添加標準薬 1本
3. 綿棒 25本

■検体上の留意事項

- 1 判定は、細菌検査に習熟および経験のある人の管理および指導下で実施する。
- 2 最終判定は、形態、生化学的性状テストおよびVero毒素の検出等と合わせて報告する。
- 3 判定は、必ず10分以内に行うこと。10分以内に判定しないと誤った結果を生じる可能性がある。
- 4 妨害物質として、細菌による汚染が考えられるので、無菌的に使用する。
- 5 検体中に共通抗原をもつ菌種が存在している場合は偽陽性を示すので十分注意する。
- 6 本品は、*in vivo* 試験のみ使用する。
- 7 増菌培地は、大腸菌 O157 用の培地を使用する。
- 8 偽陽性が疑われる場合は、100℃で加熱後に再テストする。
- 9 キット付属の綿棒以外は使用しないこと。
- 10 前処理として検体を100℃で加熱することによって、特異性が良くなることもある。

■使用上または取扱、上の注意

- 1 細菌は、習熟した人の管理指導下で十分に注意をして取り扱う。
- 2 使用前に必ず使用取扱説明書を読め。
- 3 添加標準薬には0.02%フジヒナトリウムを含有するので廃棄の際は、多量の水で流す。また、フジヒナトリウムは、銅や鉛と反応して爆発性の金属アジドを生成する恐れがあるので注意する。
- 4 試薬および菌液等が皮膚にふよびたときは直ちに洗い流すか、消毒をする。
- 5 廃棄は、高圧滅菌するか、消毒液に浸してから焼却処分する。
- 6 有効期限を過ぎたものは使用しない。
- 7 保存温度は守る。
- 8 *Salmonella* O30 群および *Citrobacter* の一部が交差反応を示す。
- 9 キットに付属の綿棒以外の消毒薬を使用した場合、正しく反応しない場合がある。

イムノクロマトグラフィ法キット

NOW「アスカ」大腸菌 O157

アスカ純薬株式会社

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-4

本品をご使用になる前に、必ずお読みください。この使用取扱説明書は、必要なとき読めるよう保管しておいてください。

大腸菌 O157 : H7 は、食水系統感染症の志賀毒素産生性大腸菌 (Shiga toxin-producing *E. coli* STEC) の一に分類されている。

ヒトの STEC 感染は、食品または水中の 100 個以外の菌数でも大腸菌と誤って検出、出血性腸炎を起こして溶血性尿毒症症候群 (HUS) を発症することが知られている。

本品は、イムノクロマトグラフィーの原理を利用した簡便かつ迅速に大腸菌 O157 を検出するキットである。

■特徴

本品は、免疫学的分析法を利用して迅速に選択培養液中中の大腸菌 O157 抗原を定性的に検出できる。

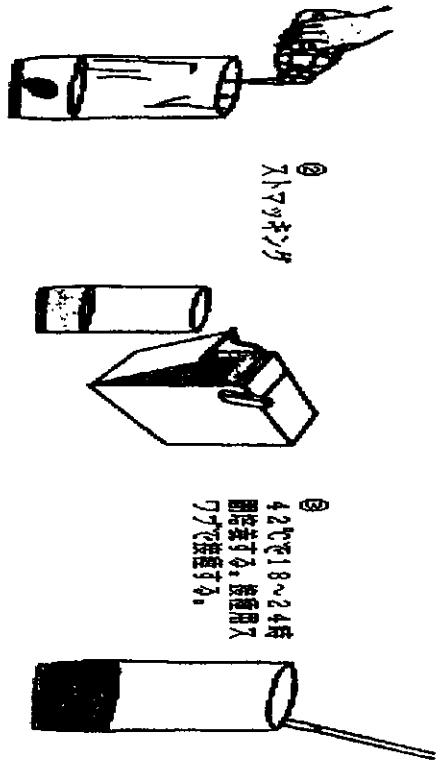
■原理

テストパネルにはウサギ抗大腸菌 O157 ポリクロナール抗体感作金コロイド粒子およびヤギ免疫グロブリン感作金コロイド粒子が吸収保持され、コントロールラインには抗ヤギウサギ血清が、サンプリングラインにはウサギ抗大腸菌 O157 ポリクロナール抗体が固定されている。検体中に大腸菌 O157 抗原が存在すると、ウサギ抗大腸菌 O157 ポリクロナール抗体感作金コロイド粒子と抗原抗体反応を起こして補足され、次にサンプリングラインのウサギ抗大腸菌 O157 ポリクロナール抗体と反応してサンプリングラインに赤色バンドが表示される。一方、コントロールラインは、ヤギ免疫グロブリン感作金コロイド粒子がコントロールラインの抗ヤギウサギ血清と抗原抗体反応を起こして補足され赤色バンドを示す。判定は、両ラインに赤色バンドが表示されたとき陽性、コントロールラインのみ赤色バンドが表示された場合は陰性となる。

■使用方法

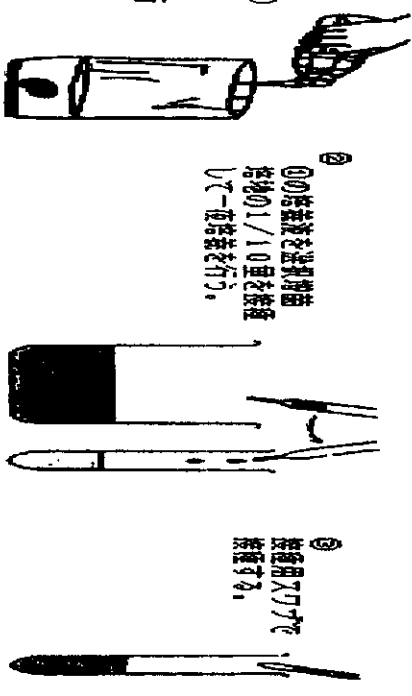
■試料の調製

- ① 食品試料を2.5g採取し、22.5mlの選択培養液を加える。

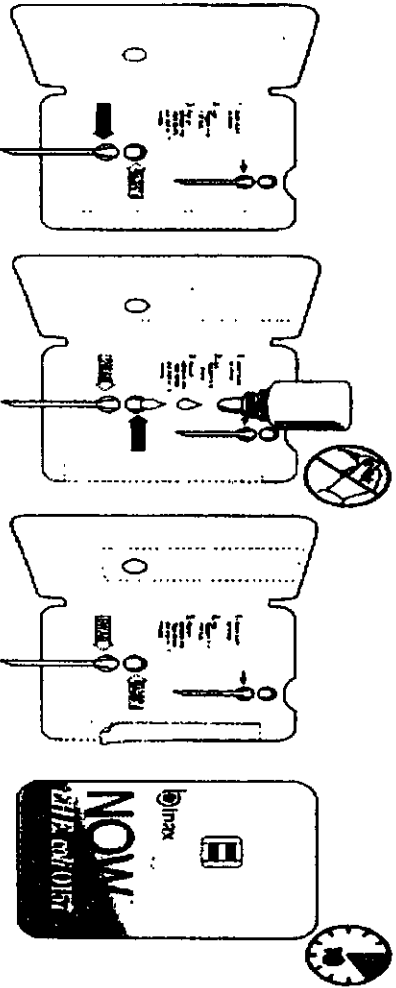


その他の検体

- ① 冷蔵などの凍結25gを採取し、22.5mlのペプトン水を加え、ストマックパックにて、6~8時間前培養を行う。



■操作方法



調整した検体に検体用スワブを浸し余分な液を拭いた後、右側入力の入口 (SWAB) に検体用スワブを挿入する。

添加液瓶口 (B, B+A, or C) に添加液を2滴加える。
*添加液は垂直にする。

検体用スワブに添加液が吸収されたのを確認後、テストパネルの検体ゾーンを拭いて左側の入力口を振り合わせる。

10分後に判定窓を判定する。

■判定

- 陽性
サンプル中の細菌がびんが赤くなる。
- 陰性
サンプル中の細菌がびんが赤くならない。
- 判定不能
両方にバンドが表示されない。

食品試料

VIDAS ICS法

Sample 25g + BPW 225ml(37C・18h)

FeSO₄·7H₂O 64mg

0.8ml



VIDAS ICS (40 min.)

10 μl



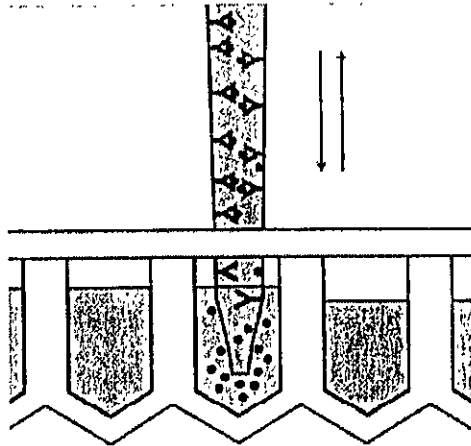
直接塗沫法 ・ ビーズ法

DHL, BGS, MLCB, XLD, BGM
Chrom TAM, ランバック, SMID

ICSの原理

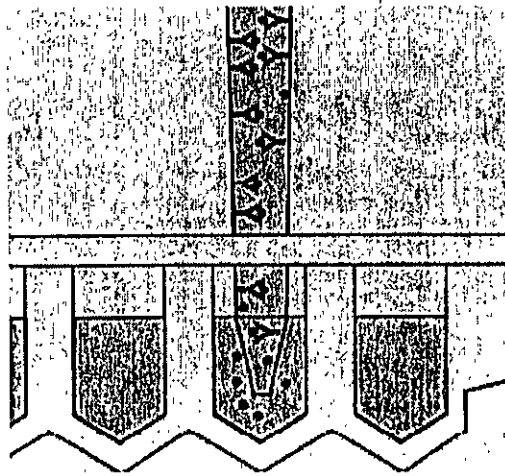
1. 集菌

スパー中に固相された抗*Salmonella*抗体による*Salmonella*の捕獲



2. 洗淨

非特異的微生物及び共雑物質の除去



3. 遊離

特異的酵素により抗体を切断し、*Salmonella*を集菌する

